

に表現する事なく、和やかな愛情を充滿させてゐる事が必要であらう。そしてあくまでもやさしく、親しみ深く、幼児の共感を引くものであつて欲しい。はつきりした線色彩、出来る丈の保存に耐へるよい紙質、容易に買へる丈の量、戦時下には叶はぬ望みかも知れないが、戦時下なればこそ尙望みたい。戦局が苛烈になるに従つて休園する所が多くなると思ふが、そんな時、お話

お 話 二 つ

附屬幼稚園 志村貞子

子供たちはお話が大好きです。お家ではお母さんに、またお父さんに、そして身近にゐる誰彼に、幼稚園に來ては先生に、「何かお話ししてよ」とねだるに違ひありません。そしてこの子供達は次から次へとお話を求めて飽くことをしらない心の持主なのです。知つてゐるお話はみんな話してしまひました。いろ／＼本を讀んで話してやりました。もう種切れ、それでも子供は後から後から求めてやみません。「お母さん

に飢ゑたことも違は多忙な母親の手を省く爲にも、繪本に向ふ事になるだらう。さうした場合幼児の氣持を失望させない丈の、否もつと積極的に幼児の生活を建設的に導く様な健康なものが欲しい。清純な情操を養ふもの、純真な愛國心を昂揚させるもの、科學精神の芽生へを培ふもの、何れにも和やかな愛情を充滿させ幼児をとりよく環境に明るい希望を持たせたいと思ふ。

の知つてゐるお話はみんなしてあげたのよ、もうおしまひ」そんなにお話、お話つてうるさい子ねえ。こんなことがいへるでせうか。あの眼を輝かして、耳を澄ましてきゝ入る子供たちに。またそんなことをいはれたら子供たちはどんなにかつかりする事だせう。すく／＼とお話で育つた心がしなびてしまはないとも限りません。私共は何とか子供達の心の食物になるお話の種を探さなければなりません。お話の種といふ

と私共はすぐ何か手取早くお話を書いた本はないかと探します。しかし此の頃は本もなか／＼手に入りませんし、殊に幼児向のお話の本は極く少いやうです。そこで止むを得ずお話の自給自足、外に向つてあれこれと探し求めてゐたお話をお母様自身、先生自身が作つてみようといふことにならなければなりません。さてさう思ひきめて廻りを見廻してみると何とお話の世界にとりまかれてゐる事に氣がつかました。子供達にとつて親しいものは何でも私共が眼を向けさへすればよるこんでお話の材料を提供してくれてゐます。そしてこんなにも子供たちが喜んでくれるものと此方までが嬉しくなるのです。次に一つの例をあげてみます。家庭菜園のカボチャ、この頃の人氣者で子供達にも親しいものです。植木鉢に蒔いた種子から可愛い、双葉が生まれました。そこで移植をしながらお母さんはこんなお話を坊やにしました。

カボチャのお引越

坊や、カボチャがするぶん大きくなつたわね、植木鉢のお家じや狭くて窮屈さうねお引越をしませう。お日様のよくあたる坊

やの砂場のそばがいゝわね。カボチャさん
 どんどん手を伸ばしたら砂場のお屋根にしま
 せうよ。カボチャはね、柔い眞黒な土が好
 きなんですつて、こゝの土は赤いからシヤ
 ベルで掘り出して黒い土をお引越させませ
 う。カボチャのお引越の前に土のお引越だ
 わね。この土に腐つた木のハツバが入つて
 るでせう。坊や見付けた？ ハツバはね
 黒い土のお友達なのよ、だからやつぱりカ
 ボチャと仲よしなのよ。この水はね、こや
 し、くさい？、さう、こやしもね黒い土が
 吸ふどカボチャの大好きな御馳走になるの
 よ。ホラ、土の中へ——こんにちは、つて
 すつかり入つてしまつたわ。坊や土運び重
 い？ さう重くないの、坊やは力持ちね、
 ホラ、いゝお家が出来たわ、カボチャの大
 好きな黒い土のお家よ。お家が出来るとね
 ガボチャが、——もういゝの、もうお引越
 していゝの？ つてきくのよ。さうすると
 黒い土のお家がね、——もういゝのよ、早
 くいらつしやい。つていふのよ。——ぢや
 今お引越しますよ、植木鉢の土さんも一し
 よに連れて行きますよいゝでしよ。——
 あゝいゝですともいらつしやい。こんなお

話するのよ。ぢや坊や新しいお家にカボチ
 ヤの入る御門を掘つて頂戴、さあ、カボチ
 ヤさん、新しいお家が出来ましたよ。植木
 鉢のお家とさよならね。マア——カボチャ
 さん窺屈だつたでせう。ホラ坊や、カボチ
 ヤの白い細い根がこんなに伸びてゐるでし
 よ。これでチュウ——つて土の中から御馳
 走を吸つて大きくなるのよ。坊やが母さ
 んのおつばいを飲むみたいだね。さあ廣い
 お家へお引越しましたよ。黒い土が喜んで
 カボチャさんよく来たね、よく来たねつて
 白い根をしつかり抱いてくれるのよ。さう
 すると白い根も喜んで新しいお家の中へど
 ん——入つて伸びていくのよ。御馳走いた
 だいてどん——大きくなるとね、地面の上
 のカボチャさんも負けずにお空の方へ手を
 伸ばしてくるのよ。さうしたらしつかりつ
 かまつて伸びるやうに棒を立てゝやりませ
 うね。

か。お子さんの程度によつてお話の程度
 (内容)がちがつてくる事はいふまでもあり
 ませんが。

以前、子供達と草摘みをしながらこんな
 話が出ました。——この草何ていふの？—
 ねこぢやらしつていふのよ。猫の前に出し
 てやると手をこんな風に一寸まげてね、引
 掻くやうにして取らうとするのよ。先生の
 家にね、小僧つていふ猫がゐるね、ぢやら
 すととてもおもしろいのよ。こんな會話か
 ら「これ小僧にあげて——」と方々から猫ぢ
 やらしの贈物をもらつたことでした。それ
 からも子供達から時々「先生のお家の小僧
 元氣である？」などと可愛いゝおたづねを
 受け、私も可愛がつてゐた猫なのでその様
 子をいろ／＼話しますと、これが大變に喜
 ばれまして、私もどんなに何でもない生地
 のまゝの話が子供達に喜ばれる事を新しい
 氣持で味つたことでした。次の話はその一
 つを讀む話として書いてみたものです。

小僧の木登り

子猫の小僧はみかん箱のお家から外へ出
 ます。お母さん猫はお留守です。ひとり
 で箱のお家にゐるのはつまりませんし、外

はどてもよいお天氣なのです。それに小僧は此の頭木登りが出来るやうになつたので嬉しくてたまらないのです。小僧はトツトとかけ足でお庭に出るとお友達の松の木をガリガリと引掻きはじめました。小僧は柔い爪がだん／＼固くなるやうで嬉しくてたまりません。ガリガリガリと研いでおいて一いきにかけて登りました。小さい松の木が揺れて細い葉がパラ／＼と落ちまし。「高いぞ、あゝいゝ氣持」小僧は松の上からお庭を見てゐました。「おやあの木は高いなあ、お家の屋根より高いぞ」小僧は高い木をみつけると登りたくてたまらなくなりました。そこで松の木をそろ／＼降りはじめました。降りるのは登るのより少し怖いのです。ガリ／＼と松の木にしつかりつかまつて途中までくるとポーンと飛び降りしました。トツトとまたかけ足で高い木のそばへ来ました。グーツと勢よく伸びた若い竹でした。今度はなか／＼うまく登れませんがだつてつる／＼してゐますから。ガリガリガリやつと上まで登れました。「パンサーイ、高いなあ」するとさあ大變、竹は「重いよ、重いよ」といつてグーツと頭をさげはじめ

たのです。「ニヤ、お母さん」小僧はしつかりつかまつたまゝ泣き聲をたてました。「ニヤ、ニヤ、おちてしまふよー」そこへお母さん猫がとんできました。「まあまあ、小僧たらそんなところへ登つてしまつたの。お屋根の上へとび降りてこらんないさ。」ニヤ、ニヤ、こわいよー「お屋根がすぐ下にあるのよ、よくみてとんでこらんないさ」お母さんにいはれてみると、小僧のつかまつた竹は重い／＼とお屋根のすぐ上へ頭を下げてゐました。「さあよく見ておりのよ、一、二、三」お母さんの聲で小僧は思ひきつてポーンとお屋根にとび降りました。竹も子猫さんよかつたわね」とはねかへつてまたもとの通り

と立ちました。「ニヤ、ニヤ、お母さんも来て頂戴よー」小僧はお屋根の縁から顔を出して甘え聲でいひました。「今、いきますよ」お母さんが竹につかまると、竹はまた「重いよ、重いよ」といつて前よりもつと頭をさげました。お母さんはポーンと上手に小僧のそばへおりました。竹はまたビラ／＼とはねかへりました。「お母さん、この水白い木ね」小僧はまだ少し胸がどきどきしてゐましたけれど、強さうにいひました。「これはね竹つていふのよ、お母さんは教へてくださいました。それから高いお屋根からだん／＼に低いお屋根へおりてお家へかへる道も教へていただきます。」

愛兒の保育期を顧みて

松本しづ

「赤ちやんで病氣もさせずにあんよが出來た、よく色々の物がいたとける様になつた。」

お友達とよく遊べる様になつた」と喜んで

で許りある時期も過ぎて、吾が子もそろそろ團體生活をさせねばならない時が來ました。

幼稚園に入れなければならぬが、然し